第2回 絹谷幸二賞

若手画家を応援し、具象絵画の可能性を開くことを目的にした第2回絹谷幸二賞（毎日新聞社主催、三井物産協賛）の受賞者は、神奈川県相模原市の画家、大谷有花さん（32）▽奨励賞は京都市の画家、小沢さかえさん（29）に決まった。贈呈式は17日、東京都千代田区の学士会館で開かれる。【岸桂子】

秘められた強さ

大谷有花さん

神奈川県相模原市、画家

昨年秋、東京・有楽町の第一生命ギャラリーで開いた個展「Life」。矩形のキャンバスに、見開きにした本を描いた同サイズの作品を11点並べた。「四角に四角」の組み合わせ、実は相当難度の高い技。画面が凡庸になる危険性をはらんでいるのだ。

「確かに、黒い枠を描くと平面的になってしまう。絵を邪魔しない文字の加え方も苦労しました」。「でも、難題はいつもあります。クリアするたびに新しい課題を得て、反映させてきたつもり」と、今回も果敢に攻めた。

結果、分厚い本を見開いたしなり感を絶妙に構築。人間賛歌の思いを、透明感あふれる色彩で表現することに成功した。

作品は、トレードカラーの黄緑色やピンクで彩られる。想像上の動物「ウサギねずみ」も登場して、一見、甘い雰囲気が漂う。しかし、独特の透明感は、絵の具を直接ブラシに絞り出し、キャンバスをしごくように幾重にも塗り込めてできあがる。「個展の前には力こぶが一つ増えるほど」という。

好きな画家は、戦前・戦中に独自の幻想世界を描いた早世の画家・靉光。「絵の雰囲気は違うと思いますが、絵に込めた生命力や、表現したいものに対する思いの強さは共通しています」ときっぱり話した。

「黒い本―花色の対話―」
2009年、73㌢×91㌢
©Yuka Otani

おおたに・ゆうか　1977年、相模原市生まれ。多摩美術大大学院修了。2003年VOCA賞奨励賞。個展、グループ展多数　＝三浦博之撮影

選評

描く喜びを提示

本江邦夫さん（多摩美術大教授）

多かれ少なかれ状況的な、ある種の暗闇ないし澱みに未来や希望のビジョンないしメッセージを投げかけるのは、絵画の大切な役割の一つです。一方で書物は昔も今も、メッセージの最高の形式と言えるでしょう。

この二つを、生来の精妙な感性と透明感あふれるマチエールによって「開かれた本を描いた絵」として一つに結びつけ、宇宙的な別次元をまさに切り開くことで、描く喜びを提示したところに、大谷有花さんの独創があります。

描く喜びは小沢さかえさんの、想像力の赴くがままにイメージを紡ぎだしていく、瞬発力にとんだ、伸びやかな画面作りを根底から支えているものであり、ここには無限の可能性が感じられます。

造形要素抑え挑戦

中井康之さん（国立国際美術館主任研究員）

大谷有花さんの作品には既視感を抱く関係者も多いかもしれません。彼女が用いる題材や色彩は、十年来変化していないからです。しかしながら彼女はそのような造形的要素を制限しながらも、絵画がいかに成立するか、ということを果敢に挑み続けてきたと感じさせました。

小沢さかえさんの作品も一見すると空想的な夢の世界を描いた、極めて叙情的な表現に過ぎないと受け止められる要素があります。しかし、大谷さんとは違った意味で、絵画による表現の可能性を探求する中で、このような表現に至ったのでしょう。

二人の作品は図らずも柔らかな表情を見せていますが、絵画のある本質を私たちに知らしめてくれる奇貨とも言うべき賜物であると思いました。

新しい試みに力量

福田美蘭さん（画家）

2次審査の賞を決める段階で残っていた候補者は、それぞれに魅力を備えていて、比較の難しさを痛感しながらも、作品には自分自身の生活感覚から本能的に気付いたものを映しだそうとするエネルギーが感じられた。その中で大谷さんは、本に展開するという新しい試みの中にも、明るい色調で幻想的な世界を生みだす力量を発揮していた。小沢さんの作品には、こちらを説得する奥行きがあり、絵を描く喜び、見る楽しさといった絵の原点が体感できる点で、他の候補者に無いものがあった。

絵画は言葉の前に来る力によって、第一印象で決まる。これからも描くことにこだわりながら、自分の作品の中に本当に必要なものを見極めていってほしい。

奨励賞

京都市、画家

小沢さかえさん

丁寧に油絵の具が塗り重ねられ、モチーフ同士が溶け合うような不思議な画面。「ずっと泣きたかったんだ」など、想像力をかき立てる作品タイトルも魅力的だ。昨年、京都市の「MORI YU GALLERY KYOTO」で開いた個展「珠玉のポエジー」の作品群が評価された。「候補に挙がっただけでうれしかったのに。素直に喜んでいます」

転機はウィーン留学。「日本は情報が多すぎる。違う世界に身を置いてみたい」と海を渡った。しかし、思うように意思疎通をはかれない。「いい絵を描くことだけが、早く認めてもらえる道」と覚悟を決めた。

一番影響を受けたのは「暗くて寒い、救いようのない冬」という。

「嫌でも自分に向き合い、深い所に下りていく感じ。でも、それがあったから描けたのかも」

心の奥深くで醸成された物語や欧州の自然、不安な感情がない交ぜになり、明るさと切なさを感じさせる絵画が誕生した。

個展の作品群は、帰国後に京都で描いた。「ストレスがなさ過ぎて困りましたが（笑い）、視覚的な快感を追求できた」と振り返る。

「肩の力がいい具合に抜けてきた」ころの受賞。5月に東京のギャラリーで個展を控える。新たな展開が期待できそうだ。

明るさとせつなさ交錯

「世界は夢になり、夢は世界になる」
2009年、145.5㌢×112.1㌢
©Sakae Ozawa

おざわ・さかえ　1980年大津市生まれ。京都造形芸術大、ウィーン造形美術アカデミー卒業。大阪・国立国際美術館で4月4日まで開催中の「絵画の庭」展で近作を発表＝津村豊和撮影

選考過程

対象は26人に

43人に推薦依頼を発送。27人から回答を得て、選考の条件を満たした22～35歳の26人を選考の対象にした。

候補者にポートフォリオ（経歴や作品写真をまとめたファイル）を送ってもらい、事務局が選考委員3氏に郵送。選考委員はあらかじめ全冊を精査し、選考日までに鑑賞可能な作品は、個展などに足を運んでもらった。

1次選考は、1人10票で候補者を絞り込んだ後、各候補者の構成力や表現力などについて議論。再度の投票で、大谷、小沢、樫木、小西、篠原、傍島、千葉、原の8氏が2次選考に進んだ。8氏の作品を未見の選考委員は、出展作の一部を見るために各候補者の自宅やギャラリーなどを訪問。全候補者の作品を確認したうえで2次選考に臨んだ。

2次選考は、最初の投票で大谷、小沢、篠原、傍島の4氏に絞り込んだ。篠原作品は強度を感じる、傍島作品は描くモチーフに説得力があるなどの評価があった。一方、ポジティブなメッセージ性や将来性を高く評価されたのが大谷と小沢の両氏。2回目の投票で両氏の受賞が決まった。

■推薦された人たち

青木豊、浅井裕介、荒川由貴、石井礼子、岩坪賢、大小島真木、大谷有花、小沢さかえ、樫木知子、衣川泰典、小西紀行、コバヤシ麻衣子、設楽陸、篠原愛、傍島義雄、田中千智、千葉正也、南条嘉毅、野瀬早苗、野田竜太郎、原游、藤原由葵、宮城翔子、向山裕、山本太郎、吉井宏平

■回答を寄せた推薦者

石川健次、岡村多佳夫、尾崎信一郎、翁長直樹、加藤義夫、川浪千鶴、岸桂子、沢木政輝、三田晴夫、杉田敦、高階秀爾、鷹見明彦、野地耕一郎、拝戸雅彦、原久子、土方明司、藤田一人、降旗千賀子、本田代志子、松井みどり、松本透、村田真、森本悟郎、山口裕美、山下裕二、和田浩一、渡辺亮一（いずれも敬称略、50音順）

■絹谷幸二賞

日本を代表する画家の一人で日本芸術院会員の絹谷幸二さんが08年、「若さゆえの冒険ができる世代の後進を応援したい」と、賞創設を毎日新聞社に呼びかけ、実現した。絹谷さんは1974年、具象絵画の登竜門だった安井賞（96年度の第40回で終了）を、史上最年少（当時）の31歳で受賞。大いに励まされたという体験がある。

絹谷幸二さん＝梅田麻衣子撮影

賞の対象は35歳以下の画家。国内で開催の展覧会に出品された、具象的傾向の絵画を選考する。基本的には筆またはそれに準じる画材・身体を用い、紙やキャンバスなどに描いている絵画。毎日新聞社が全国の美術館学芸員や美術評論家、ジャーナリストらに推薦を依頼。回答をもとに、3人の選考委員が2度の審査を経て決定する。賞金は本賞100万円、奨励賞50万円。